

戦術を立てて上手く乗り切ったことに高虎は感心し、自らの十分の一の領地（二万石）を与える約束で勘兵衛を登用した。

ちょうどその頃、石田三成が謀叛を起こし、七月晦日、西軍の攻撃により伏見城が焼失した。よって、郡山城を取り壊し、これを伏見へ移築した。しかし町屋は取り壊さず、そのままにしておいた。この時、大和国は大部分が代官支配となった。

その後、大坂の陣の前に、筒井氏の子孫を徳川家康が探していたところ、順慶の甥に筒井定慶という浪人が大和国にいた。家康は定慶を呼び出し、領地一万石を与え、与力三十六騎を付けて郡山の古城を預けた。元和元年（一六一五）四月、大坂夏の陣の前、豊臣秀頼方の軍勢が当地を焼き払うために大和路へ出た。大將は大野治房、与力は箸尾勘兵衛・布施左京亮・万歳・細井戸・狭川左介・高井薩摩などであった。これらの者は皆浪人として、大和国の各地に点在していたが、大坂から大野主治房が呼び寄せてこの一戦の頭領に任命した。そして彼らの古参の家臣を呼び集めさせて籠城し、治房の軍勢として編成した。幸い彼らは大和地方の事情に精通していたので、他に治房自身の軍勢も少し加えた二千騎ほどで、大坂より夜中に闇晴越がりしえという難所を越えて、郡山まで道のり約二七・五キロメートルの場所に着陣した。

まず手初めに、郡山を放火すべきであるということになり、木之嶋このしまというところで軍勢を分け、二手に分かれて九条口と奈良口から攻め入った。まず、鉄砲を撃ち、関とぎの声をあげて火を放った。郡山城には筒井定慶がいたが、関の声に驚き、大急ぎで郡山城東口の柳の門というところから高田というところへ出て、東の山の中の福住すみというところへ落ち延びた。城に残って敵の侵入を防ぐ者もいなかったため、大野軍は城下にあった町屋や立派な屋敷を放火して、狼藉ろうぜきを働いた町人を何人か捕縛した。

それから南都を放火しようとした時、徳川家康と秀忠が伏見に到着した。家康は、秀頼方の軍勢が大坂から大和国へ向かい、放火におよぶのではないかと疑い、